

人面瘡 (じんめんそう)

入院経験豊富「ぼく」の
語る病院の「怪談」(奇妙
な話?) 真・都市伝説

choji



「病院」

というところで、あまり他の患者さんと仲良くしたり、余計な「世話」を焼いたりするのはよくありません。

「タブー」です。

何しろ「自分が患者」ですから。。。

一度、「共和病院」という総合病院に「急性膵炎（お酒の飲みすぎです）」にかかって、入院したとき、病室だけでなく病棟のほとんどの方と「仲良く」口を「きく」ようになったことがあります。

「急性膵炎」というのも、辛い病気で「死んだ方がマシだ」と、思うほどに「苦しい」のですが。

治療には3週間から5週間は、かかります。

でも、最初の数日で「死ななければ」、退院して「世間」に戻ってこられます。。。

けれどそのとき、ぼくのはいった「共和病院」の4階病棟は、ほとんどが「末期の癌患者さん」ばかりでした。

中には、とってもエレガントな中年女性で、「洋裁の先生」をしている方もおられました。バイパス手術を受けて「胆汁」をとられていたのですが、「手術は無理」、抗がん剤投与以外に「治療」の方法がない。。。という「診断」で・・・

抗がん剤というのは、髪が抜けたり、容貌をかえたりしてしまいます。

その方は、その「治療」を拒否し、「通院して様子を見る」という決意をされて退院されていきました・・・

病院に診察に「こられたとき」に、わざわざ4階病棟にいらして、まだ入院継続中の「ぼく」に、小さな花のバスケットを、持ってきてくださいました。

ぼくだけでなく、そのとき「奇妙に」「特に」仲良くなっていた患者さん「数名全員」にですが・・・

ぼく以外は、全員、共和病院から「日赤病院」「県立がんセンター」などに、再診療のために入院し、やはり「手術は無理」と判断され、共和病院に戻された人でした。

花を贈られて、なんか「哀しい」気持ちになりました。

でも、それだけで「世話を焼くな」「仲良くなれない方がいい」と、言ってるわけでは、ありません。

中には、「危険な患者さん」だっているのです。

お隣の「患者」さんの「床に落ちているバッグ」を拾い上げて、テーブルに置いてあげただけで、「訴訟」といわれるとは、夢にも思いませんでした・・・

(第一章に続く)

独語する患者(1)

ぼくがノロ・ウィルスというのに「やられて」、とにかく、救急車を呼ばなければならなくなっただのは、数年前ほどのことでした。

某一流企業に勤めたのに、なんかやになってやめた、ぼくは「塾講師」というアルバイトに精を出すことになっていました。

「塾」って「子供たち」と直接接するでしょう？

ちょうどそのころ、「ノロ・ウィルス」というのが「流行」していて、冬講習中に、突然、生徒が「授業中に吐いてしまう」という事件が起きました。

塾長の許可をもらい、すぐに他の生徒を「家へ帰し」、教室閉めて、「自分ひとり」で教室を「清掃」しました。

大人ですから「抵抗力」あると思ったんですが、夜中、40度近い熱を出して、救急車で「病院」に入院する「ハメ」になりました。

幸いというか・・・

「さいたま共和病院」

の、診察カードを持っていたので、すぐに「受け入れOK」を出してもらえました。

病院に「急に」入院することになると、まずは、救急病棟というところに入れられます。。。

いわゆる「ER」と呼ばれる部屋です。

交通事故に遭った「外科」の「患者」さんなんかも入ってくるから、すごい「光景」が展開されています。

まさに、TVの「ER」そのままの光景。

とにかく、この部屋で、ベッドに寝かされ、体温・血圧測定・心電図等の「検査」が行われ、自分で書ければ自分で、ダメなら看護師さんが代筆で「問診書」がつくれます。

それから、「よほど」のことがなければ、しばらく「放置」。
あとは必死に、「救急担当医」が来るのを待ちます。

担当医は一応診察して、次は、まあ血液検査・点滴、場合によっては投薬です。
薬は、「経口」の場合と「点滴に加えられる」場合が、あります。

さらに待つ。
まず数時間経過は覚悟。

救急担当医が「入院相当」という判断を下すと、入院承諾書やら何やら書かされ、ベッドが空くのを待ちます。

独語する患者(2)

「さいたま共和病院」の場合は、ひと夜めは、本館A病棟2階のナース・センターのすぐ横、オープンにつくられた「大部屋」にはいります。

この部屋は、男・女の差別ありません。

次の日の「午前中」に主治医の先生が決まり、その病棟に移ることになります。

トラブルが起きたのは、その「部屋」で、でした。

ぼくの方のベッド・スペースに女性用のバッグが落ちているのを、見つけたんです。

それでお隣さんに、

「バッグ落ちてます」

と、声をかけたんですが、返事がありません。。。

よせばよかったんですが・・・

ナース・コールすればよかったんですが。

何しろ、「この病棟」のナースは「飛び回って」いるので。。。少し遠慮もあって。。。

実は、そのときぼくは、点滴と「痛み止め」のおかげで、ちょっと元気を取り戻していました

。

病院に入院されたことのある方は、分かると思いますが・・・

カーテンで仕切られた、ベッド・ルームは狭いので、お隣のテーブルが、こっちへ少し「出っ張ってる」ことがあります。

で、ぼくはバッグを「拾い上げて」、ちょっとだけカーテンを開け、バックを「お隣」のテーブルの上に置いたんです・・・

すると。

カーテンが「突然」シャーっと「音」をたてて開けられました。

髪を赤く染め、スパンコールの付いた派手なワン・ピースを着た中年の女性が顔を出して、「ありがとう」

と、「ろれつ」の回らぬ声で、言ったのです。

ひどく「目」が「とろ～ん」としているのが、印象に残りました。

独語する患者(3)

その「夜」は、ひどく騒がしくて、大変でした。

いや・・・

これは「経験済み」なんです。

入院のベテランですから（とほほ）。

ひっきりなしに鳴る、人工呼吸器の「警戒音」

「用もないのに（おそらくは）ナースコールし続ける患者」

「大きな声で、病院に悪態をつき続ける患者」

「患者を叱りつけるナースの声」

「『しっかり自分で呼吸して！』『目を開けてください！』『xxさん。立てる？立てなきゃ、尿瓶（しびん）持ってこようか？』」

「助けてくださ～い。看護婦さ～ん」

「医者と呼ばせよ。医者を～」

「痛いよ～。痛いよ～」

まあ、賑やかです。

その上、お隣の「中年女性」は、ぼくがバッグを返した直後から、

「目を覚ました」

のか、

「寝ごと」

なのか、すごく大きな声で「ひとり言」をはじめたのです。

いや、「会話」のようでした・・・

意味は、よくとれませんでした。が、「声色（こわいろ）」を使っているのか、まるで「二人の人間」がいて、「言い争い」をしているように、聴こえました。

まあ・・・

「そういう自分も」

「急性膵炎（スイエン）」で入院した時は、ひと晩中「痛み止めくださ〜い」と叫んでましたが。。。

やっと、明け方近くに「うとうと」となったところを、

「申し訳ありませんが、ちょっと目をさましていただけませんか？」

と、ナースに起こされました。

「お立ちになれますか？」

と、ナースが恐縮したように言いました。

「え、ええ？」

ぼくは、ナースの渡してくれた、「マスク」をして、要領を得ないまま、「ふらふら」しながら立ち上がりました。

独語する患者(4)

「カンファレンス・ルームにちょっと、おいでいただきたいんです」
という、ナースの後を、「点滴棒」を転がしながら、付いていきました。

「お隣のカーテン、開けられました？」

そう、ナースに訊かれました。

「ええ」

ぼくは、意味のわからぬまま、答えました。

「バッグが落ちていたんで、拾って、お隣に返したんです」

「・・・親切はいいんですが。そういうときはナース・コールしてください」

「どうかしたんですか？」

「プライバシーを侵害されたって、クレームがついてるんです」

「ええ！」

ぼくは、驚愕しました。

(だってさっきは「ありがとう」って、いったじゃないか)

と、心の中で叫びました。

カンファレンス・ルームには、「当直」の先生まで、おられました。
顔見知りの「柳田先生」だったので、少し「安心」しましたが・・・

ぼくが、部屋にはいるなり、あの隣の、「中年の女性」が、「わめき」はじめました。

「病院のベッド・スペースは、プライベートなものだ。告訴してやる。さもなくば、すぐこの場で『こいつ』を強制退院させろ」

と、というような意味のことでした。

ぼくは、むっと、しましたが、
「この人、普通じゃない」
と、思ったので、
「親切のつもりだったんですが、不快な思いをさせたとしたら、すみません」
と、一応あやまりました。

独語する患者(5)

「まあ、午前中には、『この人も別の病棟』に移るんだし」
と、柳田先生が「中年の女性」を、なだめるように言いました。
「すこし冷静になろうよ。この人も謝っていることだし」

それから「柳田先生」は、ちょっと目配せをしてから、立ち上がり、ぼくのそばに来て、
「すまなかったね」
と、低声（こごえ）で言いました。

とにかく「ぼく」に一応謝らせて、その場を収めよう、というのが、柳田先生の「対処策」だったんだな、と察しました。

ナースと「中年女性」を残し、ぼくを促（うなが）して、カンファレンス・ルームを出ました。

「告訴するからね～」
と、部屋から「大声」が響きました。

「離脱症状なんだよ」
柳田先生が、患者についての「守秘義務」を、ちょっと侵してまで、ぼくに「耳打ち」してくれました。

「というと・・・覚せい剤？」

「うん」

柳田先生は渋い顔で答えました。

「『離脱症状（禁断症状）』起こすと、周囲すべてが『敵』に見えるらしい。本来は『依存症専門病院』に、送るべきだが、まずは『体調』を、ここで整えてやってからじゃないと、いけない

から。

君も気をつけて。

余計な『親切心』は、いらない。

患者は、自分の病気を治すことだけを、考えるんだよ」

ぼくをベッド・スペースに送ってくれました。

それからまた、カンファレンス・ルームに、戻っていかれたようでしたが、ぼくはそのまま眠ってしまいました。

(第二章に続く)

鉢合わせ（1）

病院の「朝」は、早くから動きが始まります。

ぼくは5時に、また起こされて採血。

6時半に、定時のバイタル検査。

本来8時に「朝食」ですが、ぼくは、まだ食べられる状態ではないので、廊下側（ナースセンター側）のカーテンを少し開けて、横になっていました。

隣のベッド・スペースのカーテンが開いて、例の「中年女性」が出てきました。

目が合いました。

「いやだな」

と、思ったのですが、「謝るのが勝ち」。

「おはようございます。昨日は失礼しました」

と、声をかけました。

女性は「キョトン」としたような顔で、会釈をして、再び自分の「ベッド・スペース」に戻ってしまいました。

ぼくは「拍子抜け」した気分になりましたが、

「おおごとにはならず済んだ」

ようなので、少し「ほっ」としました。

午前中には新館C病棟2階、主治医の先生も「決定」して、看護師さんに手伝ってもらい、病棟を移りました。

鉢合わせ(2)

数日で、熱も下がり、体調もかなりよくなりました。

ぼくのアパート先の、塾長さんと「ノロ・ウィルス」で「発病」した「お子さん」の御両親が、連れだって「お見舞い」にきてくれました。

「共和病院」の、「応接スペース」は、市立病院より、立派で、3面ガラス張り、カフェ・テラスのようになっています。

体調も戻ってきていたので、ぼくは、そこに、3人を「案内」しました。

ぼくたちが応接ルームにはいると、端の方のテーブルで、TVを観ていた患者さんが、ちょっと会釈しました。

驚いたことに・・・

・・・あの「告訴する」

と、叫んでいた、患者さんでした。

「なんだい。もうガールフレンド見つけたの？」

と、塾長先生に「からかわれ」ましたが、何とも答えようが、ありませんでした。

鉢合わせ(3)

その「患者さん」も、新館C号棟2階の「女性部屋」に、はいていたのです。

奇妙なもので・・・

その日から、「その患者さん」と、ときどき「口をきく」ようになりました。

「水商売関係」の方かな？

と、思ったのですが、仕事は「タクシー・ドライバー」ということでした。

今は、女性タクシー・ドライバーは珍しくはありません。

う～ん

「覚せい剤依存症」

で、タクシー・ドライバーは「危ないなあ」と思ったのですが、それは黙っていました。

そのかわり、

「プロ・ドライバーだと、健康診断、厳しいんじゃないですか？」

と、訊いてみました。

「飲酒の方が、厳しいわね。覚せい剤は、健康診断じゃ、分からないわよ。薬物検査なんて、しないもの」

と、彼女は「真顔」で答えてくれました。

「一度離婚したこと。息子さんが、『傷害事件』をおこして『少年刑務所』にはいること。ついつい『付き合っていた男』に勧められて、『覚せい剤』に手を染めてしまったこと」

などを、問わず語りに語ってくれました。

また、共和病院を退院したら、
「赤城（群馬県渋川市）にある、『依存症治療専門』の病院には行って、『覚せい剤依存』から
、本気でぬけ出したい」
とも、『真剣』に語ってくれました。

「覚せい剤」

の「誘惑」には一度負けたけれど、この人なりに「必死」に、「生きよう」としていることが
伝わってきて、最初抱かされた「とんでもない人」という「印象」は薄らいでしまいました。

（第三章に続く）

水晶沼公園(1)

ぼくが、退院するとき、彼女は、
「さいたま交通・俊藤紀子」
という、名刺をくれました。

「介護タクシー・介護ヘルパー二級」
と、いう肩書きに、すこし驚きました。

その表情に気づいたのか、彼女、「俊藤さん」は
「少し苦笑」
しました。

「けっこう、がんばってた時期あるのよ」
と、言ってから、
「ケータイ番号もあるでしょう？もし、今の会社クビになっても、またドライバー復帰すると思
うから、気が向いたら、呼んでね」
そう付け加えました。

ぼくはまず、普通には「自動車移動」していて、タクシーとは、トンと縁がないので、
「ええ。タクシー使うときは、思い出します」
と、気軽に答えました。

それから、半年ほどしてからのことです・・・

そのころ、ぼくは、バイトをしている、「さいたま教育ゼミナール」の「緑が丘校」という「
教室」で、「応援講師」として教壇に立っていました。

専任の女性講師が「産休」を取ることになり、2か月前から講義に「穴」があいてしまう「
事態」になっていたからです。

この「教室」が、ちょっと不便なところにありました。

最近増えてきた、

「住宅地型教室」

というやつで、交通の手段があまりないのです。

その上、駐車スペースもありません。

水晶沼公園(2)

ぼくの住んでいる場所から、自転車を飛ばせば、40分くらいの場所なので、ぼくは、主に「自転車通勤」をしていました。

「自転車通勤でも、交通費は出すよ」

と、塾長が約束してくれたせいでもあります。

まあ、雨の日は、車で行って100円駐車場に停車していました。

・・・ところが。

その日は、

「雨」

の予報じゃなかったのに、帰宅する、「夜10時」に外に出てみると、「大雨」だったのです。

とても「自転車」で帰る気にはなれませんでした。

ぼくは、

「ふ」

と、あの「俊藤紀子さん」を、思い出しました。

もらった「名刺」を、財布の中に入れっぱなしにしていました。

「名刺」を取り出すと、

・・・奇妙に「懐かしい」ような気分になりました。

ぼくはケータイで、会社の「さいたま交通」の方に「電話」をいれてみました。

訊いてみると、

「俊藤ですね。すぐにかがわせます」

という「答え」です。

「復帰できたんだな」

と、ぼくは、少しだけ「うれしく」なりました。

水晶沼公園(3)

「俊藤さん」の車は10分ほどで、教室の「玄関」前に、停車しました。

「よく、覚えてくれてたわね」

ぼくを迎えてくれた、俊藤さんの声も、こころなしか、弾んでいました。

タクシー会社の、制服でしょう。

白い綿のシャツに、えび茶色のベストを合わせ、薄くお化粧をした「俊藤さん」は、病院にはいっていたときよりも、「2つも3つ」も若返ったように、見えました。

ぼくが住所を告げると・・・

「水晶沼公園の横の道を抜けたあたりね」

と、ちょっと「声」を落としました。

「水晶沼公園」というのは、さいたま市の中でも有名な公園です。

灌漑用の水の「ため池」だった周辺に、市が「桜や藤棚」などを植えて、さらに野球場やプールなどを設営、「水晶沼公園」として、整備した。

ということです。

「おとなしくしててよ」

俊藤さんが、ちょっと奇妙なことを口にしたので、ぼくは、

「え？」

と、訊き返しました。

ぼくに「おとなしくしててよ」と言ったようにも、思えなかったのです・・・

では、だれに？

「ごめん。なんでもないわ」

俊藤さんは、明るく言いましたが、ぼくの「心」には、ちょっと「ひっかかる」ものが生じました。

・・・そういえば。

俊藤さんの「息子」さんが傷害事件を起こしたのが、「水晶沼公園」だったな。
と、病院で「聞いた話」を思い出しました。

「おとなしくしていてよ」

は、それにしても「ヘン」です。

ひとり言？

息子さんが「少年刑務所」から出てきて、「また暴れないように」とでも、祈ったのかなあ？
そうとも、考えましたが。

釈然（しゃくぜん）とは、しませんでした。

水晶沼公園(4)

「あの」

と、ぼくは少し話を別の方向に移しました。

「赤城の『専門病院』は、いつ退院されたんですか？」

そう訊いてみました。

「うん」

俊藤さんは、少しためらうように、答えました。

「最低、3カ月はいなければならぬんだけど。。。2週間で脱出しちゃった」

「ええ！」

ぼくは、さすがに驚きました。

「駆け落ち、しっちゃったのよ」

「か、駆け落ちですかあ？他の患者さんと？」

「ええ。もう別れちゃったけど」

...

ぼくが答えないでいると、

「でも、もう『覚せい剤』とは、一切手を切ったから、心配しないでね」

と、言いました。

車が「水晶沼公園」に近づいてきました。

急に、グンと体がシートに抑え込まれました。

俊藤さんが、車のスピードを上げたのです。

ちょうど「水晶沼」の横の道路に、さしかかったあたりです。

突然のことでした・・・

「お前はな・・・」

俊藤さんとは、別の声がしたのです。

「お前は、呪われているぞ～」

はっきり、そう聞こえました。

「おとなしくしてよ！やめて！大事なお客さん乗せてるんだから」

俊藤さんが、叫びました。

俊藤さんは、車線を変えながら、前の車を次々追い抜き始めました。

体が右左に振られました。

何が起きたのかわからず、

「俊藤さん、スピード落として！」

と、ぼくは叫びました。

「だめよ、あなたも呪われる」

俊藤さんが、悲鳴に近い声で、返事しました。

(第四章に続く)

沼に棲むモノ(1)

「はは！お前の周囲にいる者はすべて『呪われる運命』なのだ」

また、俊藤さんとは、別の声が響きました。

「はっ」と思い出しました。

病院での出来事です。

バッグをテーブルに返した夜を。

あの日、俊藤さんが、しばらくの間、まるで、

「誰か別の人と会話」

しているような、「ひとり言」をいていたのを！

ぼくは、車の「ルームミラー」に目をやりました。

が、俊藤さんの「表情」をうかがうことは出来ませんでした。

ぼくの住むマンションの前に着いたときには、ぼくはもう「命からがら」という気分になっていました。

料金は2000円弱くらいでしたので、すぐに2000円を出して、

「ありがとう。おつりはいいです」

とって、降りようと思いました。

しかし、お金を受け取ると、俊藤さんは、しばらくうつむいたままでいました。

ドアを一向に開けてくれません。

ぼくは「動くに動けずに」困惑しました

沼に棲むモノ(2)

俊藤さんが、声をひそめて、話し始めました。

「うちはね江戸時代に『水晶沼』を造った、地主の子孫なのよ。

あの沼を造るので、たくさん犠牲者が出たそうよ。

沼の底には『怨霊』が、棲みついているのよ。

あたしの『血筋』は、沼の『死神』に、呪われているの」

そう、暗い声で言いました。

「息子が『傷害』の罪を犯したのも、あの沼の近く、あたしが『覚せい剤』に初めて手を出したのも、あそこよ。あの辺りには『売人』が出没するのよ」

唐突に、俊藤さんは、シャツのボタンはずし、二の腕までたくしあげました。

そこには・・・

「人の顔」がありました。

いえ。

・・・そう「見えた」のです。

ぼくは、すぐにそれが、

おそらく「覚せい剤」を打ち続けた「注射」の痕（あと）だな、と察しました・・・

でも！

急に・・・

その「人の顔」が「あっ」と目を見開いたのです。

それから、真赤な口を開き、
「ひいひいひい」
と、笑いました。
その声は、俊藤さんの「もの」とは思えませんでした。

その次の瞬間、俊藤さんは、タクシーの客側ドアを開けました。
「ごめん！逃げて」
そう言いました。

ぼくは無言で、タクシーを降りました。

沼に棲むモノ(3)

ぼくが降りると、すぐにタクシーは、「発進」しました。
変な言い方ですが「後も見ずに」という感じでした。

凄いスピードで走り去る、俊藤さんのタクシーのテール・ランプを見送りながら、ぼくは、しばらくの間、呆然としていました。

(終章に続く)

後で調べたのですが。

「・・・水晶沼が、江戸時代の灌漑工事で出来たもの。。。」

というのは、「うそ」あるいは、俊藤さんの「思い込み」にすぎないことが分かりました。

実際に沼が造られたのは「明治時代後期」、公園に整備されたのは、戦後のことだと、いうことでした。

でもどうして「沼」なんていう、ちょっと暗いイメージのある「名称」を、残したのでしょうか？

由緒ある「名前」をやたら、「高級そう」な名称に変えてしまうのに。

緑台。

だの、桜ヶ丘、だの・・・

どこかで「聞いたような」名前に。

「水晶湖公園」

としたって「不思議」はなさそうなのに・・・

俊藤さんの中に「沼」のイメージが、どう「反映」しているのか、は、まったく不明でしたが・・・

そんなことが、すこし気になりました。

俊藤さんは、「覚せい剤」から、離れられないのでしょうか・・・

「依存症」に陥った人は、「嘘」「幻覚」「真実」区別がつかなくなるそうです。

俊藤さんの腕にあった「人の顔」のようなもの。

それが、

「覚せい剤」

の、「注射の痕」なら、少し意味合いが違うのですが・・・

「人の顔」のように見える「できもの」を人面瘡（じんめんそう）というそうです。

「しゃべったり」「モノを食べたり」するようになる、という「伝説」があるようですが、「それはただの『怪談・奇談』の類で、フィクションということです。

「できもの」

や

「注射の痕」

が

「人の顔」

のように「見えた」としても、それは、「人面魚」のように「たまたま」そういう「風」に見える「例」があるに過ぎない。

でも、あの「俊藤さん」とは別モノに聴こえた声は・・・

「声色（こわいろ）」

の、じょうずな人もいます。

一人で二人が会話しているように感じさせることなど、そういう「人」にとっては、「簡単」なのかも知れません。

あるいは俊藤さんは、それを無意識にやっていたのでしょうか？

俊藤さんの腕の、

「人の顔」

が、目を見開き、赤い口を割って

「嗤（わら）った」

ように見えたのは、ぼくが「怯えて」いたせいだったのかも知れません。

「覚せい剤依存症者」

の「幻覚」に「まきこまれてしまっただけ」なのだと、思いたい。

・・・そう自分自身を納得させても。

どうしても・・・

そう、今でも・・・

あの「人面瘡」が、

気味悪く嗤った「表情」を、脳裏から「ぬぐい去る」ことができないでいます。

(おわり)

※「後書き」を、続けてお読みください

後書き(1)

『御伽婢子（おとぎぼうこ）』

江戸前期の仮名草子。瓢水子松雲（浅井了意）作。

1666年刊。

に、収録されている「話」が有名です。

「昔々、山城の国、小椋（おぐら）と言うところの農民が、長い間患いました。

その病は、悪寒（さむけ）を生じ、発熱して瘧（おこり。。。烈しいふるえ）のような症状だったり、あるときは、全身が痛みました。

いろいろ治療をしたのですが、効果がありません。

半年ほど後、左の股（また）の上に「できもの」ができたのでした。その形は「人の顔」のように、目と口を持っていました。それができてから、他の病は消えました。

ただ、「できもの」がひどく痛みます。ためしに「できもの」の口へ酒を入れてみると「できものの顔」が赤くなる。

餅や飯を入れれば、「人の食べるように」口を動かし、飲み下す。食べ物を与えれば、その間は体の痛みがとまり苦しみがやわらぎます。しかし、食べさせないと、再び痛むのです。

病人は、痩せ衰え、衰弱した。

色々な医者が、医術をつくしても効果がありません。

そこに「修行の旅」の「僧」が通りかかり、農人の家に来て、こんな話をしました。

「この、できものは世の中にマレなものだ。この病気を起こした者は、必ず、死んでしまう。しかし、一つの方法を用いてみれば癒（い）えることもある」

患者は、

「この病さえ治れば、私の田畑を売りつくしてしまっても、おしくはありません」と、答えました。

患者は、田畑を売りに出して、その金を僧に渡しました。

後書き(2)

僧は、そのお金で、薬の材料を買い集め、金、石、土、草、木と一種類ずつ順番にできものの口に入れてみた。

「できもの」はこれをすべて、のみこみました。

が、貝母(ばいも..ユリ科の多年草「フリチラリア」)という草を、「できもの」の近くに寄せると、口をふさいで食べないのです。

僧は一計を案じ、貝母を粉にして、できものの口を押し開き、葦(あし)でできた筒を使って、口の中に吹き入れました。

それから十七日で、そのできものはかさぶたを作って治ったのです。

これが「人面瘡」伝説です。